

死んだ女性を思い続ける男性像

～『嵐が丘』と『ノルウェイの森』～

要旨

氏名：四倉 拓馬

本論文では、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』と村上春樹の『ノルウェイの森』を比較することによって、「死んだ女性を思い続ける男性像」という物語上の要素を分析した。結果、『嵐が丘』と『ノルウェイの森』においては、どちらも「死んだ女性を思い続ける男性像」が極めて重要な役割を果たしているが、その文学的特性は正反対であることを示した。『嵐が丘』はいわば運命的で、全体的な悲劇の物語であり、一方で『ノルウェイの森』は人為的で個人的な悲劇の物語といえるような特性がある。

二章までの、原作の『嵐が丘』と映画化された『嵐が丘』の分析によって、『嵐が丘』は人間のドラマでもあり、愛憎劇でもあり、同時にゴシック的、神秘主義的、超自然的要素が渾然一体となった非常に複雑で様々な解釈が可能な作品であるということを示した。それゆえに作風の異なった多数の映画化作品が存在しているのだとも結論付けた。

また第三章の『ノルウェイの森』の分析によって、『ノルウェイの森』がアメリカ文学から多様な影響を受けているということを示しつつ、それを通して個人的な物語であることを示した。第四章の DA アルゴリズムを使った分析においては、『嵐が丘』と『ノルウェイの森』はともに「死んだ女性を思い続ける男性像」という要素を含み、かつ悲劇の物語という共通点はあるが、その悲劇性が正反対であることを示した。愛し合うべき男女が引き裂かれる理由が、『嵐が丘』ではいわば運命的であるが、『ノルウェイの森』では人為的であると結論付けた。

本論文における『嵐が丘』と『ノルウェイの森』の比較を通じて明らかになったのは、『嵐が丘』は近代の小説ではあるが、古代の神話を思わせる要素を多分に含んだ作品であるということである。『嵐が丘』は 19 世紀の作品ではあるけれども、近代の合理的な心理主義的作品の系譜に属する『ノルウェイの森』とは大きく異なる。『嵐が丘』は細かい心理、心情の流れが限定されていない、それゆえに様々な解釈が許される余地が存在しているのだと考えた。